

## 第五二章 新天新地

### I 新天新地

大きな白い御座のさばきと、初めの天と地の崩壊に続く出来事として、新天新地の創造があげられるが(黙示録 21:1)、「もはや海もない」という描写のほかには、新天新地に関する特別な描写はない。しかし、そのかわりに新しいエルサレムについて詳しく書かれている。

### II 新しいエルサレムの全般的な描写

黙示録 21:2 の表現を見ると、この都は「天から下ってくる」と書かれ、創造されたとは書かれていない。それは明らかにその前の千年王国の期間中、たぶん地球の上に衛星都市として存在していたものと思われる。それは、復活したり、移されたりした聖徒たちの千年のあいだの住居であるのかも知れない。

「花嫁のように」という表現は花嫁なる教会をさすものではなく、ここではその都の美しさの表現と考えるほうがよい。

新天新地に関する他の聖書の箇所はイザヤ書 65:17、66:22に見られる。また、2ペテ 3:13で、もう一つの描写がなされており、その特徴は「正義の住む」所であるとされている。

### III 新しいエルサレムの幻

黙示録 21:10で、ヨハネは高い山に連れて行かれ、エルサレムの情景を見た。

そこには「神の栄光がある」と書かれている。都は 60メートル以上の高さの城壁に囲まれ、その壁には 12 の門があり、12 の御使いがついているようすが描かれている。門には 12 部族の名が書いてある。都は正方形で、東西南北に面しており、一辺が約 2220 キロメートルある。高さも同じであることから、正立方体なのかピラミッド型なのかという疑問を生んだ。

全体としてこの都の材質は半透明で、光を通す。神殿は無く、日光、月なども必要ない。神の栄光と小羊とが光を与えるからである。

また、そこにはいのちの水の川がある。ほとりには 12 種類の実のなるいのちの木があった。

ヨハネはこの描写を神からのことばをもって結んでいる。(22:7) この新天新地が聖徒の永遠の住みかとなることを考えれば、その描写はあまりにも簡単すぎる。しかし、聖書が今の時代の人々の救いのために記されたものであることを考えれば、このような新天新地の描写は、信仰を持った者たちに希望を与える光として、未来のことを垣間みるためになされたものであり、ことさら多くの記述は必要なかったと考えられる。

神はある程度まで「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの」(1 コリ 2:9)を示されたが、神が永遠において、人間に啓示されることは、疑いもなく遥に多いことであろう。そして、我々の大いなる神は、永遠の終りのない果てに至るまでも、イエス・キリストを救い主として受け入れた者たちに、その限りない愛と恵みを現すことを喜ばれるであろう。